

あしもとにむてき

「くしゅんー！」

あたしは、思わず目をつむっちゃった。

秋も終わり、一気に寒くなってきた、うちの学校も風邪ひきがいっぱい。ついにほのかまでひいちゃったっていうから、見舞いに来たんだけど。

「くしゅっ!!」

やっぱりイヤな音。ほのかって華奢やせだから、聞いているこっちが痛くてたままないよ。静かな家だから響きすぎちゃってるしよ。

「あ、飛んだ? こめんね、なき くしゅんー！」

「だから、起きなくていいってば」

バジャマ姿のほのか、ベッドから体起こしてるけど、眼え半分つむってるよ。はあ。さっさと

終わらせて、寝かせないとね。

「ほら、宿題のプリント。もう、あたしじゃ手伝い

できないんだからね」

ほんと。もうちよつと頭よければ、なんとかできるんだけどねえ。はあ。

「ん? 現国の宿題よねー あん、なきさつたら、揺らさないですよ」

いや、あたし持つてないし。ふとんの上に置いてるんだけど。っていうか、

「現国じゃなくて数学だよ。ちよつと、ほんとに大丈夫なの?」

あたしが顔のぞぎ込んだら、目の前で手えひらひらさせて、

「うん。だいじょぶ、じょぶ、じょぶ」

ああ、言いながら一緒に体が揺れてるし。ぜんぜん説得力ないじゃん。

「たんぱく質のぎょーこ温度は、よんじゅうに度お。

わたしはさんじゅーきゅう度だから、らから、らくしゅっ!!」

もう、見てらんないよ。まったく。

「病人は、だまって寝てるっ!!」

ほのかの両肩を軽くつきとばして、上からぶとんかぶして、と。よし。

「ま、宿題はほのかなら朝でも間にあうだろうし、ごはんはおばあちゃんが作ってくれてるしさ。あとやることって言ったら、忠太郎の散歩くらいでしょ？あたしがやるから、寝てなっつて」

あたしは、カバンからコンパクト取り出して、机の上に乗せた。

「メッブル、帰ってくるまでよろしくね」

あたしがそう言ったとたん、ぼんっ、って音。すぐいつものぬいぐるみ おっと、ごめん。メッブルたちが机の上に腰掛けた。

「まかせるメボ。なんだつたら、ひと晩かけてもいいメボ」

ゆびでコツンと頭つついてやったけど、顔ゆるみっばなしだ。ポルン、うちに置いてきちゃったからなあ。

ま、ほのかさえ見ててくれれば、ちょっとくらい

ラブラブしてもいいか。

トサツ

ん、なに？ ええっ!? ちょっと目を離してたら、ほのかがベッドからずり落ちてるじゃない!

「忠太郎の散歩あ。それは、わたしじゃ、ないと、ない、と くしゅー! くしゅんっ!!」

だっっ! もっ、なにやってんのよっ!!

両脇に手を入れてベッドに戻そうとしたけど、腕ばたつかせて ええっ! いっ!

「いいかげんにしないと、おしゃぶり口に入れて、頭の上でメリー回すよっ!」

「もっ、冗談ばっかりい♡」

「メッブル、ミッブル。紐でつるすから、ほのかのまわり歌いながら回っててくれない?」

机の上に向かってそう言ったら、あばれた腕がだらん、って下がった。

「す〜と〜ぶ〜。わかつたわよ。おとなしく寝ますよ。それでいいんでしょ？」

自分でベッドによじのぼってる。うん、効果あったみたい。

落ちちやつたふとんをまたかけてたら、あしもとがなんだかふかふか。下向いたら、見上げてると目が合った。

「あれ、忠太郎。待ちきれなかったの？」

声をかけたら、くるんって後ろ向いた。首輪から伸びてる引き綱が、あたしの目の前にひょいっ、と出てくる。さっさと行こうってことね。はいはい。

あたしはその引き綱を手にとって

「なぎさ！ ちょっと待 くしゅ！ くしゅっ!!」

び、びっくりした。ほのか、いきなり飛び起きるんだもん。もう、そこまで信用ないかなあ。

「寝てる、って言ったでしょ？ まったく ん？」
背中さすってあげて、やっとかくしゃみがおさまっ

た思ったら、ほのかの目がまんまるになってる。目の先は、あたしの 手？

「ど、どうしたの？」

ほのかの目が、あたしと忠太郎を行ったりきたりして、それからいきなり、にこって笑った。

「ううん、なんでも♡」

ほのかの家を出ると、あたしは忠太郎の散歩コースを歩いた。広めだけど車どおりの少ない道。地図を渡されたけど、まるつきり必要ないな。だって、忠太郎が勝手に歩いてくんだから。

歩いてると、犬の散歩してる人と結構会った。子犬つれたおばさんとか、乗れそうなくらいの犬つれたおばあちゃんとか。まあ、たしかに、散歩にもってこいの道だもんね。

でも、忠太郎ってこころじゃ有名なんだな。みんな

なが名前知ってるし、いつもの女の子はどつしたの、とか何度も聞かれちゃったしね。ちよつと変だけど、普通の犬なんだけどなあ

「お〜い、なあぎさあ〜」

忠太郎の背中を見ながら歩いてたら、声がちよつと上のほうから聞こえる。目を上げたら、前は土手。その上で志穂と莉奈が手を振ってた。

あたしも手を振って、土手に上がる坂道に向かった。ちよつと散歩のコースだから、忠太郎が歩いてくだけなんだけどね。

「お待たせっ」

そついいながら、なぎさが土手の上にながってきただ。けど、そのまま歩いてっちゃった？

「ちよつとちよつとちよつと、そのまま行っちゃうなんて、冷たいぞあー！」

あたしがそつ言ったら、なぎさが首だけ振り向いて、「志穂お、ごめんっ。いま、ほのかん家の犬の散歩中でさ、止められないんだ」

あたし、莉奈と顔見合わせて、ため息ついちゃったよ。しかたない、追いかけるか。

「悪いね、ふたりとも　で、志穂たちはなににしてんの？」

ピンつ、と張った引き綱を握りながらのなぎさが、なんだか苦笑いしてる。あたしと莉奈はちよつと目で合図して、同時に目の前に出したげた。まだあつたかい、ふわふわクレープ。

「なに言ってるの。この先の公園に、新しいクレープ屋ができる、つて教えてくれたの、なぎさじゃない」
莉奈が言ったとたん、うああっ、つて悲鳴。耳が痛くなるくらい。

「あ、あの店って、今日開店だったけ!?! ああつ、今日だけチョコバナナ半額がっ!」

なぎさ、忘れてたんだ。

「忠太郎？ ちよあつと寄り道して、いい？」
少し中腰になって犬に尋ねてるなぎさが、いきなり
転びそうになった。

「うわっ、ひ、引つ張らないでよっ！」

一直線に駆けてく犬つて、結構きれいだな。あ
たしはそのとき、ぼーっとそんなことを考えた。
あっけにとられる、つて、こういうことを言うん
だな。きつと。

「なぎささ、だいじょうぶう？」

「無理っばいっ うわあ〜っっ!!」

「莉奈莉奈り〜な。見た、なぎさ？」

まっすくな土手の道の向こうに、ちっちゃくなつ
てくなぎさ見ながら、あたしはちよこつと訊いた。

「犬の散歩つて、慣れないとた〜いへんなんだよねえ」

莉奈がクレープぱくつきながら大きくうなずいて、
ひとこと言った。

「こりゃ、明日の練習じゃへたばつてるかな？」

ひい、ひい

あーっ、疲れた。忠太郎、いきなり走りだすんだ
もんなあ。すつこい力で、全然おさえられないし
でも、志穂たちが見えなくなつたら、またいきな
り歩きに戻っちゃった。二人が嫌い？ まさか、ね。
「あれ、美墨さん？」

いきなり背中から聞いたことのある声がして、あ
たしは思わず背筋伸ばしちゃった。この声は

「ふ、藤P先輩!？」

ジャージ姿の藤P先輩が、振り向いたあたしの目
の前にいた。思わず綱を引つ張つたら、忠太郎がそ
の場で座つちゃつて動かないよ。ど、どうしょ。

「だ、大丈夫なの？」

へ？

「大丈夫つて なにがですか？」

藤P先輩、びっくりした顔で見てる。あたしと、忠

太郎を。

「そうか、きみは大丈夫なのか」

「そういえば、散歩に出るときはほのかも、こんな顔だったっけ。大丈夫、って？」

「忠太郎はね、むかしっから人になつかない犬なんだよ」

チリンチリン、って自転車のベルの音。あたしたちは河原側によけた。忠太郎は、あたしの足元で座りなおしてる。

「へ？ そんなことないですよ。本気で噛まれたこともないし」

「ああ、うん。噛むことはないね。でも、綱を持っているのは、ほのかとおばあちゃんだけなんだよ。」

ほかの人が綱を持つとうとすると、すっこく嫌がるんだ。俺もいまだにダメだよ。」

思わず、引き綱をじつと見ちゃった。いや、だって綱を持ってって感じてあたしに渡したの、忠太郎だよ
ね？

「噛まないのにはわけがあつてね。俺が言つたつてこと、ほのかには内緒だよ？」

あたしは思いつきりうなずいた。ないしょ。藤P先輩とのないしょ。うっひゃあ♡

「ほのかが小学校の中学年のころ、一人で忠太郎を散歩に連れてつたことがあつてね」

ついニヤニヤしちゃう顔を元に戻してたら、藤P先輩がしゃがみこんで、忠太郎の頭をなでてた。忠太郎はちろっ、と見上げただけ。本当に、引き綱だけが特別なんだな。

「そのとき、たまたま通りかかった男の子が大きな犬連れててさ、どっちが強いが、戦わせてみようつて言われたんだ。」

ほのかは昔っからあだからさ、忠太郎が嫌がつてるからダメ、って突っぱねたんだけど。それを無理に引きはがそうとした男の子に、忠太郎が突進した。そのとき、ほのかは何て言つたと思う？

しゃがんだままの藤P先輩が、あたしを見上げて

る。な、なんだかドキドキするよあ。

「『かんじゃダメっ！』って叫んだんだよ」

え？

「テレビで保健所の話とかやってたから、きつと、人を噛んだら殺されちゃう、って思ったんだろっね。

それから忠太郎は噛まなくなった。大きな中学生に、体当たりでぶつかってって ついに相手が逃げ帰ったときには、忠太郎の体もガタガタになってた。俺がちょうどそこに通りかかったのさ」

ドキドキが急になくなった。藤P先輩は、まだ真つすくあたしを見てるのに。

「あのときのほのか、自分が悪いんだって言ってね。医者から帰ってから、忠太郎を誰にもさわらせなかつたよ。毎日えさをあげて、薬をとりかえて。忠太郎の舌で調子がわかる、なんて言い出したのも、そのときかな」

忠太郎は座って背中を向けてる。背筋をピンと張って、川の向こう側をじっと見つめてる。

あたしの頭に、さつき会った散歩してる犬の顔が浮かんできた。種類も年も違うのに、なんだか同じような雰囲気目の目が。

「それ以来、こちら辺の犬は忠太郎を尊敬してる感じなんだ。まさに無敵だね」

「ちがう」

口からこぼれてきた言葉に、自分でもびっくりした。藤P先輩が、驚いた顔であたしを見てる。けど、心の中のあたしが言つんだ。間違いない、って。

「忠太郎といると、ほかの犬があたしにも挨拶して行くんです。何だろな、って思ってたんですけど

みんな、その、忠太郎がうらやましい、っていうか ああっ、もう！うまく言えないなあっ!!」

こんなとき、もつと頭がよかつたらなあ、って思つよ。ホント。

ああ、藤P先輩が立ち上がった。バカさ加減にあきれちゃったのかなあ そう思ってたなら、あたしの肩が、ぼんぼん、って叩かれて、

「ありがとう、美墨さん。忠太郎が綱を持たせてくれない理由、やっとわかったよ」

にっこり笑った藤P先輩、ジヨギングであたしたちの来た方に走って行っちゃった。

なんとなく視線を感じて、ちよつと下を向いたら、忠太郎があたしの顔を見てた。

「行こっか」

あたしが歩くのといっしょに、忠太郎が立ち上がってトコトコ歩き始めた。

今度はいっしょに歩き始めた。

真つすぐな土手道をずつと歩いてると、橋が見えた。近づくにつれて大きくなる橋の上を、ときどき電車が通ってる。

あたしは散歩の地図を取り出して、見比べてみた。

この先で、折り返しなんだよね。半分きちゃったか
そう思ったとき、右手がいきなり引つ張られた。あれっ、と思って見てみたら、忠太郎がしゃがんじゃってる。トイレかな？

「忠太郎、するんならもうちよつと砂地がいいんじゃない？降りてから」

割り箸の入ったビニール袋を取り出しながらそう言いかけて、あつと思つた。トイレじゃない。忠太郎は、河原をじつと見つめてるんだ。

そこはたしか、あの子が闇に消えたところ

「そっか、いつもここで、立ち止まってるんだね」
じつと見つめてる忠太郎の背中を、風がなでてくふわつと持ち上がった毛が、夕日できらきら光ってる。あたしは頭を何度か振って、ぐいっつと綱を引いた。

「ワウ？」

首だけ振り向いた忠太郎の眼が、あたしに抗議してる。けど、あたしは思いつき息吸って、

「立ち止まっちゃダメだよー！」

大声を出したあたしを、忠太郎が体ごと振り向いて見上げてる。今度は、ちよつとにらんだ眼で。

あたしはしゃがみこんで、その目をじつと見つめた。

「引っ張つてあげてよ。それは あんたにしかできないんだからさ」

忠太郎はしばらくじつとあたしを見てから、目をつむつて立ち上がった。

「うわっ!」

しゃがんだままコケちゃったあたしを、忠太郎が引きずつてく。なんとか立つてついてったけど、まだ引っ張つてるよ。

「忠太郎、引っ張りすぎっ! ほのかには、もうちよつと手加減するんだよ」

あいかわらず、ふんっ、っていう顔でこつちを見てから、また忠太郎が引っ張り始めた。

腕にかかる重みが、なんだかうれしかった。

土手の道を半分くらい戻ったところ、忠太郎が河原に降りてトイレ済ませた。

犬のトイレの始末は初めてだけど、まあ、あたしは亮太のオムツ替えたこともあるし、どうつてことないね。けど、ちよつと気になることがあるんだ。

忠太郎、あたしが後始末するときに、いきなりあたしにもたれかかってきたんだ。終わったらすぐに元に戻ったけど。あれって、なんだつたんだろ?

「お、もう帰り?」

土手に上がろうとしたところに、ちょうど藤P先輩が走ってきた。あたしの手を取つて、引っ張りあげてくれるよ。ああ、今日はいい日だなあ♡

あ、あれ? 土手に上がったと思ったら、藤P先輩の手がすぐ忠太郎のほう行っちゃったよ。

「忠太郎は本当にいい犬だよなあ」

そう言いながら、背中や頭なでてる。あたしって、

ひよつとして 犬以下？

「ほら、この背中さ。いつでもピンと張ってるんだ。拾い食いとかもしないし、ほのかは、よっぽどしっかりしつめたんだらうな」

心の中で泣きながら藤P先輩の言葉聞いてたけど、なんだか引つかかった。しつめた、ねえ。でもさ、

「忠太郎、さつきあたしにもたれかかってたんですけど」

「ええっ!? 忠太郎。お前、どこが悪いのか？」

あ、あれ？ 藤P先輩が、なんだかすごい反応してるよ。ひよつとして、言っちゃ悪かったのかな？

「あ、あーあー。石があったから、ちょっとつまづいちゃったんだよね。もたれるなんて、あるわけないもんね。そうそう れれれ!!」

いきなり、藤P先輩の顔が遠くなってきた。忠太郎が、引つ張ってるんだ。

「忠太郎、あんまりほのかに心配かけるなよ？ じゃ美墨さん、また」

ああ、藤P先輩が走って行っちゃう。もう、忠太郎ってなんでこう あれ？ 忠太郎の顔、なんだか妙に一生懸命だよ。

しゃんとしてないのって、もしかして、恥ずかしいのかな？

「なぐささ、お帰りい」

土手の道ももうすぐ終わり、下の道に降りるちよつと手前に、志穂たちがいた。両手になにか持って

うわぁ♡

「チヨ、チヨバナナクレープ！ ひよつとして、あたしに？」

代わりに買ってきてくれるなんて、やっぱり、持つべきものは友達だよねえ。

「ほのかちゃんの代わりに、犬の散歩でしょ。ちよつとはごほうびないかね。えっと この犬、忠太郎

だっけ？」

あたしがうんうん、ってうなずいて、クレープにかじりつこつとしたら、莉奈がいきなりしゃがんで、「はい、忠太郎。なぎさは大変だったでしょ？こほうびね。」

そう来たかい。

「うそうそうそ ちゃんとなぎさの分もあるってば。はい あれ？」

志穂がクレープ出そうとして、途中で止まっちゃった。

「あれれ？ 犬ってクレープだめだっけ？」

莉奈が差し出しているのに、忠太郎がそっぽ向いちゃっているんだ。でも、変だな。嫌がっているようには見えないけど。 あ、ひよっとして。

「きつと、自分ひとりで食べるのがイヤなんだよ。ほのかに持って行ってやれば、いっしょに食べるんじゃないかな？」

莉奈と志穂が、ふたりしてあたしをじーっと見つ

めてる。

あ、あれ？ 莉奈が立ち上がったって、志穂と一緒にあたしの肩叩いている？

「なぎさなぎさなぎさ。あたし、信じてるからね」

「忠太郎の分まで食べたら、人間おしまいだよ」

こ、こいつらはあゝっ！！

ふたりと別れて土手を降りてから、あたしは小さなトンネルに忠太郎を引つ張っていった。

トンネルの中で、不思議そうな顔の忠太郎に、

「いまのほのかには、油ものはマズいからね」

そう言っであたしは、さっきのクレープを出してあげた。忠太郎の目が、クレープとあたしの間を行ったり来たりしてる。

「ここなら誰も見てないよ。なんなら、あたしもあっち向いてるからさ」

忠太郎はじつ、とクレープ見てるよ。もう、世話が焼ける あれ？

「ワフー。」

うわつ、いきなり飛びかかって、左手のもうひとつのクレープくわえて、

「むぐつ!!」

あたしの口に押し込んだじゃった!! ちよつと、いったい何を って、忠太郎もクレープ食べてる?

はっはーん。そついうことね。

あたしは忠太郎の脇に座つて、肩に腕かけた。

「もうちよつと、気楽にやる? あんたは、カツコつけすぎよ。」

「おや、ほのか、どこ行くんだい?」

ちよつと眠つて目を覚ましたら、なぎさが散歩に行つてもつゝ時間。もうそろそろ帰つてくるかしら、って思つて廊下に出たところに、おばあちゃまがいたわ。

「あ、ちよつと、おトイレ。」

そそつ、と脇を通り過ぎようとしたけど、音もし

ないで横に動くんだもの。やっぱり、だめみたい。

「そうかい、そうかい。でもねほのか、もし帰りに台所寄つたりなんかしたら、オムツはかせてベッドにくくり付けますからね?」

おばあちゃま、にこにこ笑つているけど、真つすぐ私の目を見てる。これ、本気だわ。

わたしは、思わず笑ひそつになつちやうた。さつき
のなぎさと同じこと考えてるんだもの。

でも、これだけは、ね。

「ねえ、おばあちゃま。もうすぐ、忠太郎が帰つてきちやうのよ。忠太郎はわたしの手からじゃないと、ごはん食べてくれないでしょ? なぎさを追い出すわけにもいかないし、だから。」

わたしが言いかけたところに、おばあちゃまの手のひらが出てきた。

「ほのか。あなた、なぎささんは好きですよね?」

「ええ、そつ。一番の友だち、だけど。」

おばあちゃまの手のひらが、すつ、と降りたわ。じつとわたしの腫をのぞき込んでる。

「いい、ほのか。あなたが信じる人なら、あなたの友だちだって必ず信じてくれますよ。もうちょっと、気楽にいなさいな」

おばあちゃまが言い終わるのといっしょに、わたしの体がふわつと浮いた。

「トイレは要らないみたいですから、ベッドに戻りなさいね。それじゃ」

ぼてん、つとベッドに落ちたわたしを、机の上のミッブルたちがぼあつと見てる。まあ、普通は信じられないわね。病人を、投げてベッドに戻すなんて。

「くしゅんっ……」

ああ、いけない。これでひどくなったら今度こそ、なぎさかおばあちゃまに赤ちゃん扱いされちゃっわ。

「信じる人なら、友だちも信じてくれる、か」「ふとんにもぐり込んでいたら、おばあちゃまの言

葉がこぼれてきた。

忠太郎となぎさが、仲良くいっしょにごはんを食べてる図、か。

「なんだか、いい夢見れそう♡」

「ただいまあ」

ほのかの部屋には、忠太郎が先に入ってた。もう、あなたのトイレの始末で遅くなったんだけどな。なんか、ずるいよ。

「シート！ ほのか、寝てるミボ」

机の上から、ミッブルがにらんでる。こめぐる。でも、ほのかの寝顔があ。なんだか久しぶり。ちよつと拝見

「もう、なぎさだったら。こぼさないの」「え？ なに？」

「さつきから、ブツブツなにか言ってるメボ。顔が笑ってるから、悪夢じゃないみたいメボ」

な、なんだ。寝言かあ。びっくりした。 あれ、

またなにか言ってる？

「ほあ、忠太郎はきれいに食べてるでしょ？ なぎさもちゃんとお座りして食べなきゃ」

ちよ、ちよっと、ほのかさん？ あたし、忠太郎と同レベル？

ばっ、と振り向いたら、メッブルたちがそっぽ向いてる。その場に座り込んだあたしの肩に、ぼん、って忠太郎の前足が乗っかってきてるよ、起こそうにもこんなな気持ちよさそうに寝てる病人じゃあ

「あん、わたしをなめちゃだめよ♡ もっ、いたずらっこんなだから♡」

あああ〜っ、もっっっ！！

「ほのかあ、お願いだからその夢やめてえええ〜」